

1 平成17年度の成果と課題

【成果】

- リサーチを実施したことに対する、自己評価が過去で最も高くなった。
- 実施への不安感も下がり、アクション・リサーチが市民権を得つつある。
- アクション・リサーチの意義や効果について、より深い理解ができた。
- 英語教育関係者外から良い評価を受けた。

【課題】

- リサーチ初期段階の充実
- ポートフォリオの質の向上
- メンタリングの効果的な方法の研究
- 報告書の個人情報への対応

以上のことから、昨年度からの改善点としてあげた、リサーチ初期段階のサポートの充実、年間の手順をより明確化かつ確実に伝達、報告会の改善、研修の雰囲気づくりなどは、一定の成果があったと考える。また、自由記述意見からすると、「定着」意識の浸透という点も、着実に達成されているようだ。

一方、教科教育の専門性・専門的知識の向上については、引き続き課題を残した。

2 平成18年度の具体的な改善点

(1) リサーチの全体計画の変更による質の向上

仮説の設定までの段階を、より綿密に行うことにより、リサーチの質を高める。そのために、1年間に1つのアクション・リサーチに変更する。特に、リサーチ・クエスションの設定までのプロセスを充実させる。

(2) 『アクション・リサーチ・ナビゲータ』の編纂

自律的にリサーチを進められるようにするため、過去3年間に分かった改善点も盛り込んで、「アクション・リサーチ・ナビゲータ」を作成する。

(3) 報告会の実施方法の変更

中間報告、報告会の形式を変える。中間報告は、リサーチの質を高めることを目的として事例研究形式とする。最終報告会は、お互いの実践交流のためにポスターセッションとする。

(4) アドバイザーの直接指導機会の充実

アドバイザーの招聘の機会を、最終報告会から中間報告の事例研究を中心にする。

(5) 研修記録の質的向上

- ・ポートフォリオに体系性をもたせるために、内容物のある程度指定をする。
- ・報告書の様式の改善
- ・個人情報の保護という観点から、報告書原稿の提出前に、メンターとの原稿のやりとりを行う。

(6) 研修成果の検証の開始

平成19年度の終了時及びその後の継承を視野にいれて、研修成果の検証を始める。まずは、自己評価を、事前、事後に分けて、変化をみるようにする。

(7) メンタリングの充実

メンタリングリストは1つに絞り、ペースメーカー的な役割をもたせる。メンタリングは、メンタリングリストに代わって、電話などによる受講者支援を中心とする。

3 研修の評価—自己評価のまとめより

研修の効果をより具体的にみるため、本年度から、オリエンテーション時(4月28日)と報告会(12月28日)の両日に、研修自己評価を行うようにした。自己評価に係る設問は同一とし、自由記述欄のみ別のものになっている。昨年度までは、報告会においてのみ実施していたため、設問を少し修正している。

以下、(1) 全体的な傾向 (2) 設問ごとの分布 (3) 自由記述意見の分類をとおして、研修の成果を分析する。

(1) 全体の傾向

○各項目ごとの平均値をみると、全体に改善していることが分かる。特に、中学校の数値の向上が大きい。

○4ポイントスケールで、0.2ポイント以上の改善がみられた項目をみると次のような結果となった。ただし、統計的処理は行っていない。

①全体で変化がみられた項目

- アクション・リサーチの進め方を理解している。(＋0.97)
- 現在、授業を通じて、生徒の英語力が高まっていると思う。(＋0.31)
- 授業中、生徒が英語を使う機会は多い方である。(＋0.31)
- 英語教育に関する専門的な知識をもっている。(＋0.24)
- 英語力を高めるための自己研修を日常的に行っている。(＋0.22)

②中学校のみで変化が見られた項目

- 授業の目標や授業の進め方について深く考察している。(＋0.23)
- 英語で授業することは、負担ではない。(＋0.23)
- 生徒との間に望ましい人間関係を築いている。(＋0.22)

アクション・リサーチの進め方を理解できたという項目がもっとも改善している。次いで、生徒の英語力の向上と授業における生徒の英語使用機会の確保にも改善が見られた。

平成18年度			プレ(2006.4.28)						ポスト(2006.12.28)					
			設問別平均			領域別平均			設問別平均			領域別平均		
			高校	中学	全体	高校	中学	全体	高校	中学	全体	高校	中学	全体
1 教育的 人間力	1	授業をすることが楽しい。	3.25	3.21	3.23	3.04	2.93	2.99	3.31	3.26	3.29	3.10	3.07	3.09
	2	授業の目標や授業の進め方について深く考察している。	2.88	2.73	2.81				2.98	2.96	2.97			
	3	職場の同僚と授業について気軽に話をしている。	3.25	3.10	3.18				3.20	3.17	3.19			
	4	生徒との間に望ましい人間関係を築いている。	3.04	2.98	3.01				3.12	3.20	3.15			
	5	生徒の願いやニーズを踏まえて、授業を改善している。	2.78	2.64	2.71				2.90	2.78	2.85			
2 英語 運用 能力	1	授業で可能な限り英語を使おうとしている。	2.35	2.44	2.39	2.25	2.21	2.23	2.35	2.63	2.48	2.38	2.48	2.43
	2	英語で授業することは、負担ではない。	2.33	2.31	2.32				2.41	2.54	2.47			
	3	授業中、生徒が英語を使う機会は多い方である。	2.08	2.06	2.07				2.29	2.48	2.38			
	4	英語力を高めるための自己研修を日常的に行っている。	2.25	2.02	2.14				2.45	2.26	2.36			
3 英語 教授 力	1	現在、授業を通じて、生徒の英語力が高まっていると思う。	2.52	2.48	2.50	2.53	2.32	2.43	2.67	2.98	2.81	2.77	2.79	2.78
	2	現在、授業運営はうまくいっており、生徒の授業態度は良好である。	2.96	2.96	2.96				3.14	3.11	3.12			
	3	授業終了後、ほぼ毎日、授業についての振り返りをしている。	2.65	2.44	2.55				2.80	2.46	2.64			
	4	アクション・リサーチの進め方を理解している。	2.31	1.71	2.02				2.92	3.07	2.99			
	5	英語教育に関する専門的な知識をもっている。	2.20	2.00	2.10				2.33	2.35	2.34			
平均			2.63	2.51	2.57				2.78	2.80	2.79			

表1 プレ、ポスト評価別平均値

平成18年度			比較(ポスト-プレ)					
			設問別平均			領域別平均		
			高校	中学	全体	高校	中学	全体
1 教育的 人間力	1	授業をすることが楽しい。	0.06	0.05	0.06	0.06	0.14	0.10
	2	授業の目標や授業の進め方について深く考察している。	0.10	0.23	0.16			
	3	職場の同僚と授業について気軽に話をしている。	-0.06	0.07	0.00			
	4	生徒との間に望ましい人間関係を築いている。	0.08	0.22	0.14			
	5	生徒の願いやニーズを踏まえて、授業を改善している。	0.12	0.14	0.13			
2 英語 運用 能力	1	授業で可能な限り英語を使おうとしている。	0.00	0.19	0.09	0.12	0.27	0.19
	2	英語で授業することは、負担ではない。	0.08	0.23	0.15			
	3	授業中、生徒が英語を使う機会は多い方である。	0.22	0.42	0.31			
	4	英語力を高めるための自己研修を日常的に行っている。	0.20	0.24	0.22			
3 英語 教授 力	1	現在、授業を通じて、生徒の英語力が高まっていると思う。	0.15	0.50	0.31	0.25	0.47	0.36
	2	現在、授業運営はうまくいっており、生徒の授業態度は良好である。	0.18	0.15	0.16			
	3	授業終了後、ほぼ毎日、授業についての振り返りをしている。	0.16	0.02	0.09			
	4	アクション・リサーチの進め方を理解している。	0.61	1.36	0.97			
	5	英語教育に関する専門的な知識をもっている。	0.14	0.35	0.24			
平均			0.14	0.30	0.22	0.14	0.30	0.22

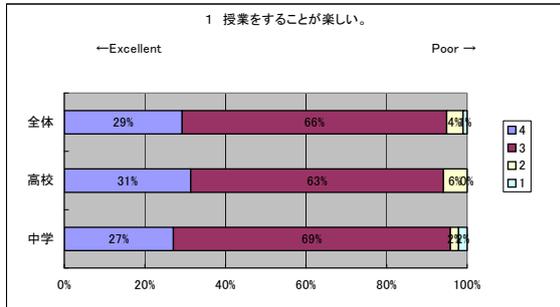
表2 プレ、ポスト評価の比較

(2) 設問ごとの分析

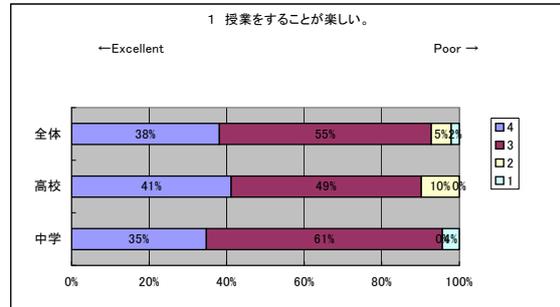
1 教育的人間力

① 授業をすることが楽しい

平成18年度 英語教員指導力向上研修 授業改善プロジェクト 自己評価
1 教育的人間力 プレ(2006.4.28)

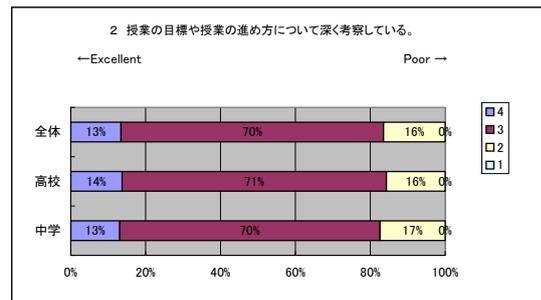
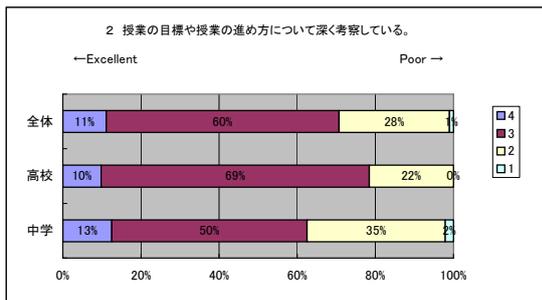


ポスト(2006.12.28)



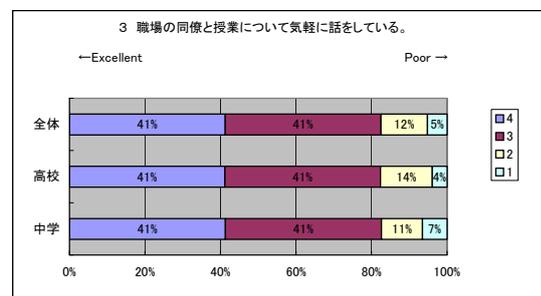
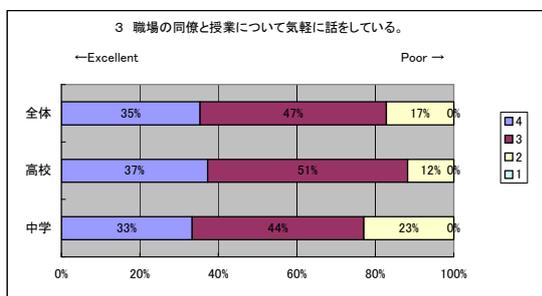
年度当初の段階から自己評価が高い項目であったため、全体としての変化は少ないが、4 (Excellent)と回答した割合が、10%程度増加している。

② 授業の目標や進め方について深く考察している。



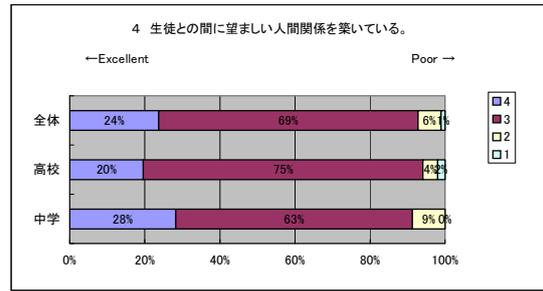
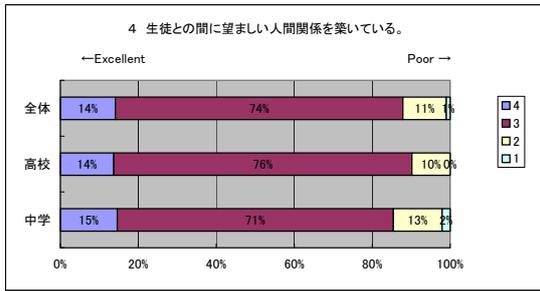
授業について深く考察するという姿勢は、全体的に改善している。特に、年度当初あまり高く評価していなかった中学校での伸びが大きい。

③ 職場の同僚と授業について気軽に話をしている。



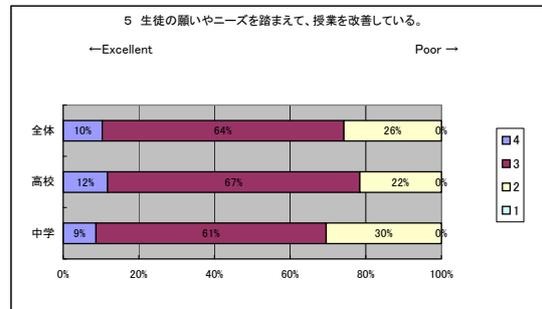
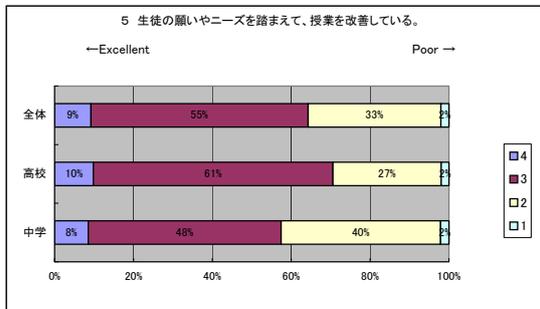
年度当初から比較的高い数値を示しており、全体的な変化は少ない。この設問でも、4 (Excellent)と回答した割合がやや増加している。予想以上に日常的に授業について同僚とコミュニケーションができていようである。

④ 生徒との間に望ましい人間関係を築いている。



年度当初から比較的高い数値を示していたが、さらに全体に数値が改善している。アクション・リサーチが、教員と生徒の人間関係構築に良い影響を与えることが分かる。

⑤ 生徒の願いやニーズを踏まえて、授業を改善している。



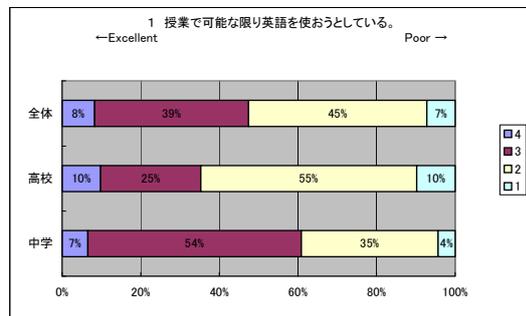
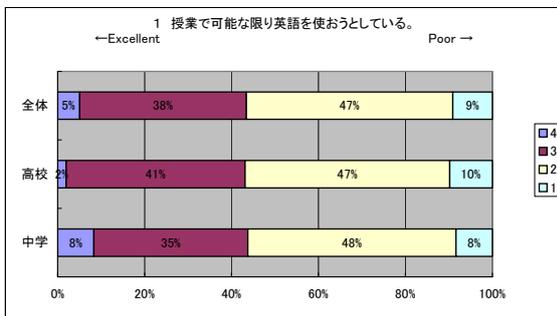
若干の改善は見られる。生徒の願いやニーズを踏まえて授業を改善できるようになっていると実感できるレベルまでには到達していないのであろう。

2 英語運用能力

① 授業で可能な限り英語を使おうとしている。

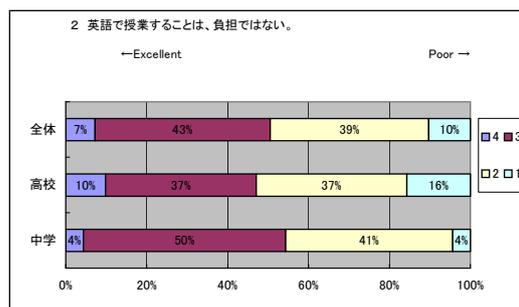
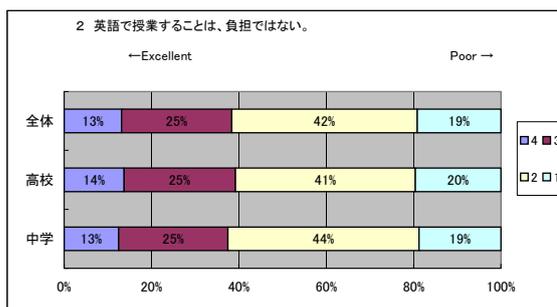
2 英語運用能力 プレ(2006.4.28)

ポスト(2006.12.28)



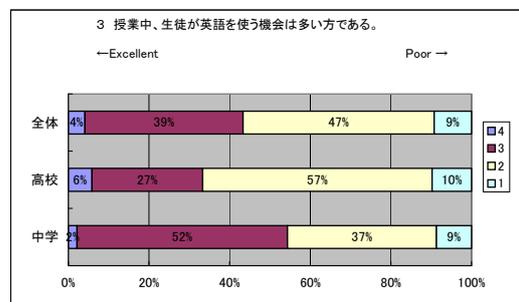
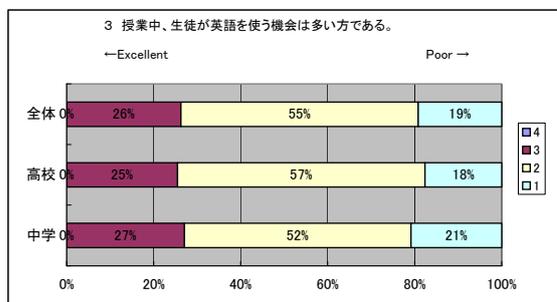
中学校で大きく改善し、高校で後退した。原因は確定できないが、1年間授業を続ける中で、中学校では英語を使うことの意義が実感され、高校ではその意義が見出せなかったということであろう。教材が難化する高校において、teacher talk としての英語使用の意義を、今一度見直す必要があるだろう。

② 英語で授業することは、負担ではない。



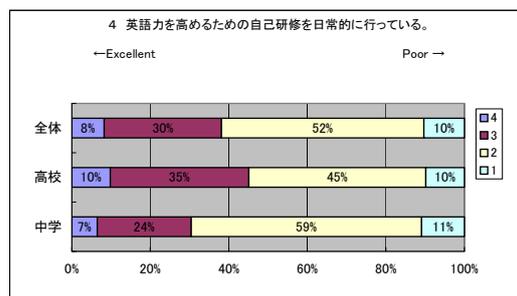
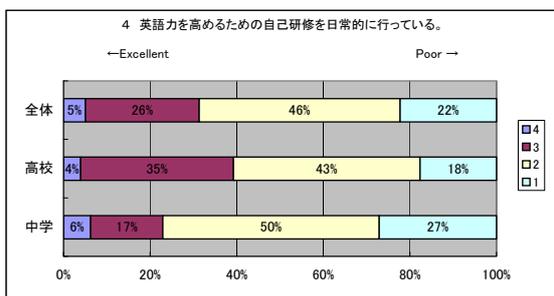
英語で授業することが負担でないとする率は、やや改善している。

③ 授業中、生徒が英語を使う機会は多いほうである。



中学校での伸びが大きいですが、高校でも若干改善している。当初4と評価したものは0だったが、高校も6%となり、生徒が英語を使う活動を授業に取り入れる意識は定着しつつあるのだろう。このアンケートからは分からないが、「英語を使う」を「英語を話す」と同義にとらえる傾向があるのではないかと推測される。他のスキルも含めて、生徒が英語を使う機会を増やすということが、英語力の定着に重要ではないかと思われる。

④ 英語力を高めるための自己研修を日常的に行っている。



授業での英語使用とは逆に、自分自身の英語力向上に対する意欲は、高校側の方が高くなっている。興味深い結果である。

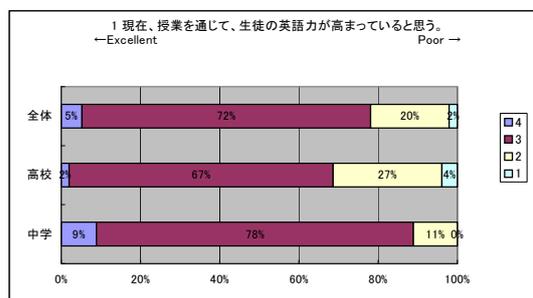
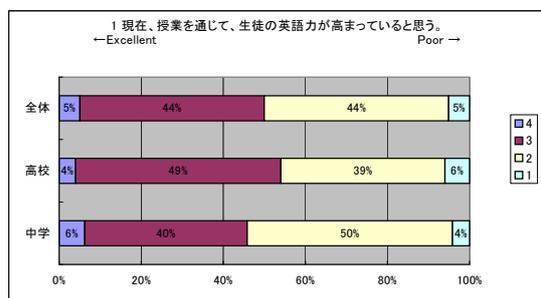
3 英語授業力

① 現在、授業を通じて、生徒の英語力が高まっていると思う。

3 英語授業力

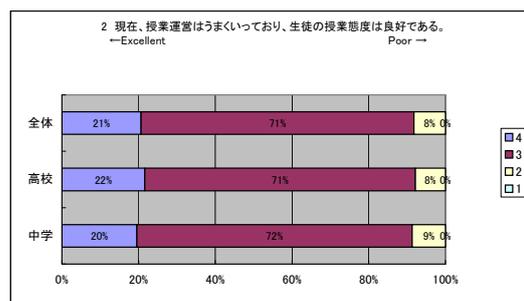
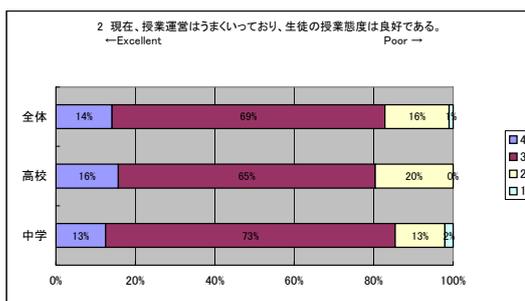
プレ(2006.4.28)

ポスト(2006.12.28)



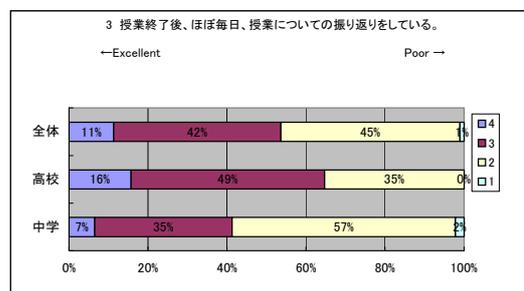
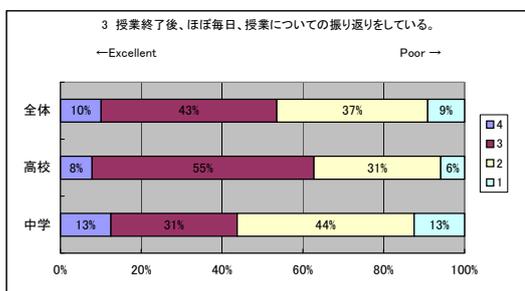
アクション・リサーチをすることで、授業が改善され、英語力が高まっていると、中高とも実感できるようになっていることが分かる。現状の学力を把握し、具体的な手立てを考え、それをデータで検証するというプロセスが、このような実感につながっているであろう。

② 現在、授業運営はうまくいっており、生徒の授業態度は良好である。



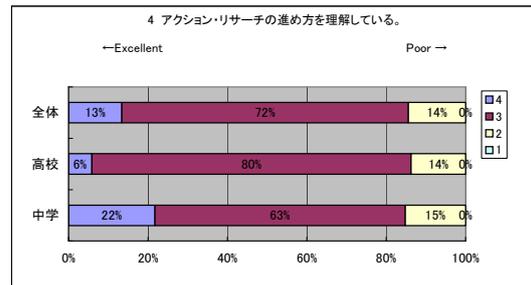
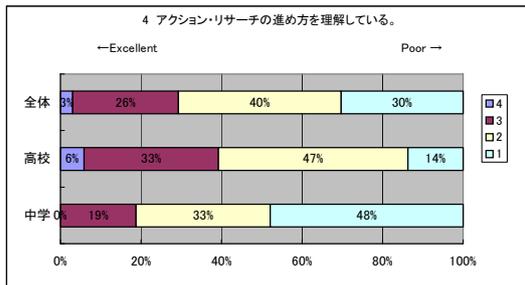
この項目も当初から高い評価だったものだが、①と同様に改善されたとする実感ももてる項目なのだろう。

③ 授業終了後、ほぼ毎日、授業についての振り返りをしている。



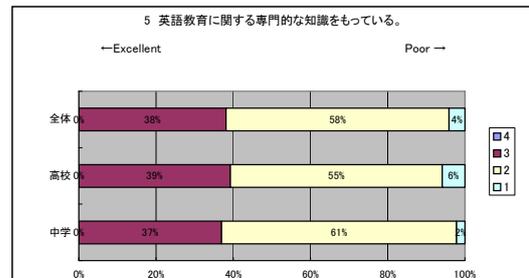
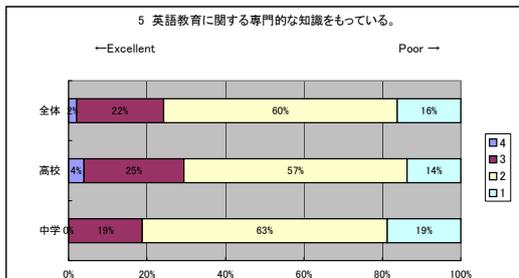
この項目も、高校側が高い数値を示している。アクション・リサーチを通して、授業についての省察の必要性を実感していることは、自由記述意見などからもみとれる。それを、日常的に継続するには、中学校現場はあまりに多忙過ぎるのであろうか。であるとすれば、今後は授業に専念できる環境づくりが、非常に重要になるだろう。

④ アクションリサーチの進め方を理解している。



全体の中でもっとも改善が顕著だった項目である。1年間を通して、OJTとしてアクション・リサーチを実施する「授業改善プロジェクト」のプログラムが、アクション・リサーチの手法の理解と習得に効果的であったことを示している。

⑤ 英語教育に対する専門的知識をもっている。



例年、もっとも自己評価の低い項目である。夏期集中研修での講義やアクション・リサーチでの文献研究をとおして、若干の改善があったと思われるが、教科教育についての専門的分野では十分に自信がもてるまでは至っていない。これは、教員養成課程の問題でもあると言えるが、採用後の研修の充実も必要である。採用後の研修において、より専門性を高める研修を実施できれば、経験や勘に頼った授業実践からの脱皮は望めない。

(3) 自由記述意見のまとめ

【課題発見・自己理解】

- ・自分の授業の分析ができた。(多数)
- ・生徒の目から見た自分の姿を振り返ることができた。
- ・資料を残したり、記録を残すことで、振り返って改善に向けて考えることができた。
- ・自分の授業の中で、書く活動が少ないことが分かった。
- ・作文の指導の方向性が見出せた。良い方法で続けられそうなものが確立できたと思う。
- ・授業の流れをつくることの大切さを知りました。
- ・単純に楽しさだけを求めても生徒はついてこない。その中に目的や達成感を生徒自身が感じられるものが必要。
- ・今まであきらめていた「書くこと」の指導に取り組めた。
- ・自分自身の振り返りが、やっているようで、できていないことに気づいた。
- ・これまで、いかに何も考えずに授業してきたか思い知った。

- ・生徒の弱点克服だけでなく、自分の弱点克服につながったことに気づいた。
- ・自分の授業力を高めることができたがどうかは自信がないが、自分の授業の弱点は見えてきた。

【授業改善についての気づき・発見】

◎目標設定

- ・目標を具体的にもつことで、生徒の変容も起こりやすいということ。
- ・教える側が明確な目標を立てて指導することの大切さに気づいた。
- ・ポイントを絞って指導することができた。

◎体系性、PDCAサイクル

- ・仮説をたてて検証することで、何が有効な方法かが分かった。
- ・生徒の実態をつかみ、それに対して対策をすることが確かな学力につながる。
- ・データ、生徒観察、生徒の声、育てたい力（英語教員としての在り方）、これらを明確にすることが信頼性の高い取組の根っこになる。
- ・生徒に細かな手立てをできるようになった。
- ・反省→課題→次への決意→計画→実践がスパイラルだと実感しました。

◎検証の必要性

- ・活動をやりっぱなしにするのではなく、しっかり検証していくことが大事。（複数）
- ・ただ単に試すだけではなく、結果まで考察することで、指導の効果について敏感になることができた。
- ・指導の結果を検証したのは始めてで、理論的に指導法について考えることの大切さが分かった。
- ・生徒の活動や取組などを、具体的に記録をとり、データ化すると、自分の授業のつまずきや生徒のつまずきなどが明確になった。

◎継続性、連続性

- ・継続した指導、連続した指導によって生徒の力が伸びることが分かった。（多数）
- ・細かく目標を立てて、気長に取り組んでいけば、できなかったことができるようになる。
- ・一つの指導を年間を通して行うことの大切さが分かった。また、それを通して他の力もあがっていくこと。（複数）
- ・教師が信念をもって、あきらめず続けることの大切さに気づいた。
- ・目先の結果であたふたせず、子どもを信じてゴールに導いていく努力が自分には必要である。

◎省察の機会

- ・漫然と日々の授業のノルマをこなすだけでなく、生徒に力をつけるためにはどうすれば良いかを考えながら臨めた。
- ・一つのテーマを設定して、深く考える機会をもてた。

◎多面的アプローチ

- ・固定観念でなく、多方面からのアプローチが必要である。
- ・短期的データと長期的データには違いがある。

【生徒理解】

- ・生徒の声に耳を傾けてきたつもりだったが、このリサーチに取り組むことで、気づいていなかった生徒

の声、気持ちに気づくことができた。

- ・私が思っている以上に、生徒は「分かるようになりたい」気持ちがあり、「分かる」楽しさをもっているということ。
- ・生徒の秘めたる可能性に気づいた。
- ・生徒のニーズを中心に研究を進めることができた。
- ・生徒のニーズの把握が大切。
- ・生徒の実態や欲求を少しずつでも把握することができた。また、その重要性に気づいた。
- ・生徒の活動の観察が大切であるということ。
- ・一つ一つやるごとに、生徒の感想を書いてもらい、生徒の声がよくわかった。
- ・生徒の声をきき、実態に合わせた指導を工夫することが大切であると感じた。

【教員の意識改革、意欲の向上】

- ・生徒に力がかからない原因はほとんどこちら（教員）にあると思った。
- ・自分自身が新しいことにチャレンジする動機づけになった。
- ・工夫次第で自分も変わるが、生徒の意欲も高まることが分かった。
- ・自分自身の意識が変わり、日々の授業に生かすことができた。
- ・英語教師として常に勉強していかなければならないと思った。
- ・どう改善すればよいかを考えることが以前より多くなった。
- ・教師側が考えて、取り組めば、生徒の力はどんどん伸びるし、意欲的になることが分かった。
- ・教師が工夫していけば、それに応じてくれるので、生徒にどんな力をつけたいかを明確にして取り組んでいかなければならないと思った。
- ・授業について今までよりも意欲的になりました。
- ・英語教師としての指導力を高めようという気持ちになった。
- ・生徒の英文を読むことに対する抵抗感をなくすということに関しては手ごたえがあり、そのおかげで授業の雰囲気は良くなった。三学期を楽しみにしている。
- ・教師が意欲的（真剣）になれば、生徒の学ぶ姿勢も変わる。教師次第である。

【達成感】

- ・授業が大きく変わって、生徒全員が取り組んでくれた。
- ・思った以上に、生徒が（私の定める）目標に近づいてくれた。
- ・やらなければならないと思っても、なかなかできなかったもので、強制的な研修であれ、自分のやることがクリアになり、自分の弱点が発見できた。
- ・自分が変わるという意識をもてた。
- ・改善に取り組んできたことに対して「その方法が良かった。役にたった」と言ってくれたこと。
- ・新しい試みにチャレンジできた。
- ・自分の実践を理論付けて考え直すことができた。
- ・ワクワクしながら工夫できた。
- ・やればできるという気持ちをもたせられるようになった。
- ・いろいろな活動を取り入れることで生徒の意欲を高めることができた。特に、ARで音読に取り組み、それをきっかけとして声も大きくなり、授業自体が明るい雰囲気になった。

【他の教員とのインタラクション・同僚性】

- ・ どの先生も真剣に取り組んでいることを実感した。
- ・ 同僚の意見の大切さに気づいた。
- ・ 多くの先生方の姿勢に刺激を受けた。
- ・ 文献で勉強するより、他の先生との情報交換が大切だと思った。
- ・ ぜひ、他教科の先生にもやっていただきたい。(複数)
- ・ 他の教員の実践に触れることができた。
- ・ 生徒や同僚、事務局の先生の支えがありがたかった。

【評価・フィードバック】

- ・ 生徒の小さな変化に気づくことができ、指示や注意よりも、評価の言葉がけが増えた。
- ・ 目の前の生徒が望んでいること、必要としていることを授業に反映させようとしたこと。そのことを伝えることで、生徒の目的意識も高まった。
- ・ 肯定的な評価を継続的に行うことの大切さ。
- ・ 生徒とのコミュニケーションがこれまでよりも深まり、生徒は教師からの声かけを心待ちにしていると感じた。

【FD・自己能力開発】

- ・ 自己研修の進め方が分かった。
- ・ データの生かし方が分かった。
- ・ アクションリサーチに取り組んだことで、ここでの(注 新しく着任した学校)授業の進め方、指導の仕方が自分なりに完成した。
- ・ 常に他に可能性はないか、アイデアを考えていた。

【その他】

- ・ 生徒の伸びが、成績以外にも残る。
- ・ 夏期集中研修がよい刺激になった。
- ・ 英語教育でも色々な流行があるが、やはり文法指導は欠かせないと実感した。
- ・ アクションリサーチのプロセスが、他のどのことにもつながっていると感じた。今後も継続したい。

【困難点、疑問点】

- ・ 日々の指導に追われ、なかなかゆっくり考える時間がとれない。
- ・ リサーチのまとめやデータをもっと工夫したかった。
- ・ 日々忙しく、アクションリサーチに集中することができなかった。
- ・ 授業時間以外は、生徒指導の時間をとっている。系統だった授業改善に取り組めないし、生徒にとっても魅力的な授業ができない。

- ・ 仮説、実施、検証まで今ひとつ十分に取り組むことができなかった。明日から再チャレンジしたい。
- ・ 一つのクラスに様々な生徒がいるので、その対応に苦勞した。
- ・ 生徒の学力向上がはっきりと数字で現れなかったことが気がかり。
- ・ 生徒は生き物。日々変化し、なかなかこちらの予想どおりに動いてくれない。

- ・「変わったことをやってほしくない」という生徒の冷たい態度に悩まされた。生徒にも納得が必要。
- ・学習項目の定着が最大の課題
- ・検証の検証はどこで誰がやるのでしょうか？

【自由記述意見のまとめ】

- 教員自身の課題発見、授業改善のポイントについての気づきや発見、生徒理解、教員の意識改革という点での言及が多く、アクション・リサーチは、このような領域で効果がある可能性がある。また、生徒の変化をみて達成感を実感できたという意見も多く見られた。
- 実施を開始した平成15年当時比べ、自由記述意見がより具体的でより深い省察に基づいたものになってきた印象を受ける。アクション・リサーチが根付き初めているということなのだろうか。
- 自由記述意見には、主催者側がオリエンテーションや研修の中で提案したり、アクション・リサーチのメリットとしてあげた項目が、少なからず含まれている。授業改善に必要とされる内容が、リサーチのプロセスをとおして、一定受け入れられ、内在化され始めたのではないだろうか。メンタリング、助言をあきらめず続けることの重要性を再確認できた。
- アンケート調査だけでは明確にならない部分があることが分かった。受講者へのインタビューなどとおして、より丁寧な検証が必要となるだろう。

4 まとめ

(1) 平成18年度の成果と課題

【成果】

① リサーチの質的向上

報告書及びティーチングポートフォリオを見ると、本研修の導入当初に比べると、リサーチの質自体が向上していることが分かる。アドバイザーの佐野正之先生からも、同様の評価をいただいております。これまで実施するなかで、研修プログラム自体の改善とそれにもなう受講者の実践研究の質的向上が図られた。

② 研修プログラムの効果の明確化

自己評価の方法を変更したことで、1年間の研修の成果をより具体的に明らかにすることができた。特に、アクション・リサーチが教員の資質・指導力にどのような影響をあたえるかについて、ある程度のデータを得ることができた。

③ 年間の研修プログラムの改善

昨年度、リサーチの全体計画の変更、ナビゲータの作成、報告会の実施方法の変更、ポートフォリオの改善などの変更を行った。これらの変更点は、研修プログラムの改善に役立った。

④ 研修実施上の成果の集約

過去3年間の取組をもとに、『アクション・リサーチ・ナビゲータ』を作成することができた。この冊子は、受講者が各自で参照しながらアクション・リサーチを進めることができるように編集している。

【課題】

- ① 受講者サポートのメンタリングの充実が引き続き課題。
- ② ポートフォリオの質的向上は図られたが、まだまだ体系的な省察を可能にするレベルではない。
- ③ マニュアル化されたことへのマイナス面もある。マニュアル化することで、悉皆研修におけるアクション・リサーチ実施の敷居をさげることはできたと思うが、アクション・リサーチは本来、教員の自主的な意志によって行うものである。5年間の研修実施後のビジョンづくりが今後の重要な課題となる。

(2) 平成19年度の具体的な改善策

① 『アクション・リサーチ・ナビゲータ』の完成

- ・昨年度、作成を始めた『アクション・リサーチ・ナビゲータ』を冊子版として完成させる。
- ・今後の活用方法の検討

② 研修事前準備の充実

- ・『アクション・リサーチ・ナビゲータ』の事前配布による研修のレディネスづくり
- ・オリエンテーションの充実（ポートフォリオの事例紹介、ポスターセッションのビデオ）
- ・オリエンテーション時間の延長による各活動の充実

③ メンタリングの建て直し

- ・受講者支援の改善策の検討と実施
- ・メーリングリストの再構築
 - 全体のもの → 情報提供、ペースメーカー的役割
 - リサーチグループ毎 → 情報交換、メンタリング用

④ リサーチ・アドバイザーの直接指導機会の充実

- ・夏期集中研修での事例研究での助言は継続
- ・リサーチ終了後につなげるために、報告会への招へいも検討

⑤ 研修全体の総括と今後の計画策定

本年末には、中高約400名の英語教員が全員がアクション・リサーチを経験したことになる。これは、英語教師としてのキャリアを語り合う、共通の言語をもったとことを意味する。このことの意義は大きい。この効果を最大限に生かすためには5年間の検証と以後の取組のビジョン、計画案づくりが重要な課題となる。

⑥ アクション・リサーチの効果の検証

この程度の規模の悉皆研修でアクション・リサーチが実施されたことはまれであると思われる。アクション・リサーチの効果を検証し、その成果を広く報告することは、今後の現職教員の資質・指導力の向上の研修実施にとって意義をもつと思われる。受講者へのインタビューの実施など、可能な範囲で必要なデータを加えながら、効果の検証を行っていきたい。

授業改善プロジェクトの達成目標

[目指す英語教師像]

良質の英語を使った授業を展開することができ(REAL English Teacher)、省察によって授業を改善する方法を身につけ(reflective practitioner)、新しい英語教育の創造に自ら積極的にコミットする英語教員(self-directed teacher)

[授業改善プロジェクトの達成目標と評価の観点]

1 教育的人間力

(教職に対する情熱、使命感、生徒に対する教育愛)

- 1) 授業をする楽しさを感じながら英語を教えることができ始めている。
- 2) 生徒理解が深まり、生徒との関係も今までと異なる新しい見方ができ始めている。
- 3) 授業の目標や手段や評価について深く考察する姿勢ができ始めている。
- 4) 職場の同僚と英語教育の問題点について気軽に話をするができる。
- 5) 地域や生徒の願いを踏まえて、授業改善に前向きに取り組むことができ始めている。

2 英語運用能力

(英語運用能力の向上とそれを生かした授業の実施)

- 1) 研修実施前より一般的な英語運用能力が向上している。
- 2) 自ら設定した英語力目標に対する具体的な取り組み方を理解し、継続することができている。
- 3) 授業中、最適なインプットを与えたり、生徒とインターアクションする割合が増えている。
- 4) 可能な限り授業で英語を使おうとする前向きな意識が形成されている。
- 5) 生涯にわたって英語運用能力の向上を図る意志ができている。

3 英語教授力

(教科指導に関する専門的知識と技能の向上)

- 1) アクション・リサーチによる授業改善の方法を理解し、多少なりとも実践できている。
- 2) 課題としてあげた生徒の英語力に改善の兆しが見られる。
- 3) 課題としてあげた生徒の授業態度に改善の兆しが見られる。
- 4) リサーチをした領域についての専門的な知識が増えている。
- 5) 授業後、振り返り反省する習慣ができ、生徒による授業評価も改善の兆しが見られる。